

OKIU

Vol. 119

2023
spring

MAGAZINE



2 特集：教員×学生の座談会
コロナ禍を振り返る

10 OKIU青春白書
～活躍する学生たち！
ピリカウタリ 川勝 渚羽太
Uni 伊藝 ほのか

16 研究室探訪
地域環境政策学科
上江洲 律子先生

20 本学が寄贈した資料が活用
されました
信泉と復帰～世替わりの沖
縄の未来発展を希う～

22 OKIU NEWS
TOPICS
ニュース・トピックス

28 クラブ・サークル紹介

32 大学行事案内



アフターコロナのキャンパス

対面で人と接し、学生が自由に行きかうキャンパス。大学のキャンパスを特徴づけるのは「学生」です。これからは、コロナ禍前の様に、学生が溢れるキャンパスに戻るでしょう。



コロナ禍を振り返る。

学期中なのに閑散とした教室、学生がいないキャンパス。

コロナ禍前に誰がこの光景を想像しただろうか…。

経験したこともないパンデミック、あらゆる場面で強いられた「変化」。

非日常となったあの時を、今一度振り返る。

語りあう座談会！

コロナ禍を

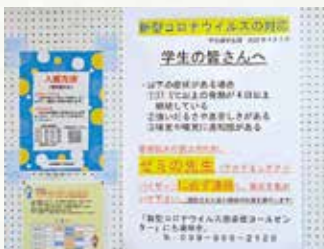
教員×学生の座談会

特集

2023年3月20日。コロナ禍を振り返るために、6名の学生に集まってもらいました。

今回話っていた6名の学生は、2020年度に入学した学生たちです。当時を振り返ると、新型コロナウイルスがまだ未知のウイルスで、緊急事態宣言、ソーシャルディスタンスなどの聞き慣れない言葉に不安になり、有名人の死亡や不織布マスク不足など、連日新型コロナ関連の情報により、「先が見えない」時間を過ごしたと思います。

そのような社会状況下で本学に入学した彼／彼女らは、入学式もなく、すぐに自宅待機、そしてオンライン授業などに翻弄され、戸惑いや不安を抱えたにちがいありません。あの状況下から、学生はどのように乗り越えてきたのでしょうか？2020年度に入学した学生たち6名の学生と教員が当時を振り返りながら、本音で語り合いました。



新型コロナウイルス対応に関するポスター
(2020年4月ごろ)



2020年4月16日に発出された緊急事態宣言に伴う本学の対応
(本学ホームページから)

浦本：皆さんは今後「コロナ世代」と言われると思います。

入学してすぐにオンライン授業に切り替わり、思い描いていた大学生活と全く異なった経験をしたと思います。当時を振り返りながら話を聞かせてください。

佐久川：入学式もなく、オリエンテーションにだけ大学に行き、その後すぐに自宅待機になりました。高校卒業してからずっと家にいたので、沖国に入学した実感がなかったのが一番でした。専門学校に通っていた友だちは、緊急事態宣言が解除されてから就活のためスーツを着て学校に通学していましたが、私はオンライン授業を自宅ですべて受けている。この状態のまま過ごしていいのかなという不安が2年間くらい続きました。勉強にモチベーションがない、なんで大学に入学したんだろうなど自問自答している友だちは多かったと思います。



浦本 寛史 [うらもとひろし]
学生部長／経済学部経済学科教授

進行役

浦本：大学へのイメージや夢があったと思いますから、当時の状況は全く異なるものだったと思います。

港川：1年次のころは、後期のゼミしか対面授業がなくて、それ以外はオンライン授業でした。家で寝間着で授業を受けたり、音声だけ流している時もある。これじゃいけないと思いつつも、勉強のモチベーションが上がりませんでした。



比嘉 彩希菜 [ひがさきな]
産業情報学部
企業システム学科 3年次
前原高校出身

一 同：わかる！

比嘉：高校生感覚が抜けてなかったですね。入学式がなかったので、大学生になったという感覚がないというのか。でも、レポート課題が出されて、何か良くて何がダメなのかを確認する場もなく課題をこなす。迷っている暇はなく、色々な授業で課題が出されるのでひたすらこなしている、という感覚でした。課題地獄というのか(笑)これは仕方ない事ですが、スポーツの授業もオンラインだったので、大学で学ぶ意味というのを考えました。あと、家族から「大学に行かないの?」とよく聞かれて、自宅で学ぶことを否定されたような感覚がありました。

一 同：わかる！

比嘉：姉も大学に通っていましたが、コロナ前なのでいつも家にいなくて忙しそうにしている。私は、制限下のため自宅待機だったので、家族はそのギャップを持っていたと思います。

浦本：玉城さんはどうでしたか？

玉城：大学に入学したらサークルに入り友だちを作って、みたいな理想を描いていましたが、1年次のころは、サークル棟に行っても人がいないという光景を見ていました。それが、2年次になり制限が緩和されて大学に学生が戻り始めると、私の中では人がいることがおかしい、異常なことと感じたんですね。つまり、1年次のころの人がいないのが大学、ってどっかで思っていたんでしょうね。人と会わずさずぎで、友だちの作り方とかも忘れてしまったのかなって思った瞬間もありました。コロナ禍で人付き合いが怖くなった自分がいました。また、私は人間福祉学科社会福祉専攻に所属していて、福祉関係の勉強をしているので、レポートの内容も自分とつながる部分がありました。コロナ禍で、誰にも会わない時期にこの課題をこなしていた時は、私自身が病みそうになりました。



玉城 明日香 [たまきあすか]
総合文化学部
人間福祉学科社会福祉専攻3年次
那覇西高校出身

照屋：福祉専攻は2年次から施設での実習などがあるらしいんですが、それもなくて。また、外部の先生を招いての授業などがあつたかと思うんですが、ほとんどオンラインになったので、1年次は空白の時間を過ごしていたという感覚です。

照屋：私も課題を進めるため、先生方や友だちに気軽に相談できないというのがキツかったですね。

浦本：嘉数さんはいかがでしたか？



嘉数 唯 [かかず ゆい]
産業情報学部
企業システム学科 3年次
南部商業高校出身

嘉数：大学に登校することなくずっと家だったので、友だちとの絆は深まりました。制限が緩和されている時は友だちとずっと対面で語り合ったりしました。ただ、それでオンライン授業に参加しなかったこともあり、1年次のころは半分ぐらいの授業を落としました。2年次になって、これではいけないと気持ちを切り替えて、履修した授業は必ず単位を取れるように努力するだけでなく、集中講義などの履修して、1年次のころに落とした分を取り戻す努力をしました。大学って、4年間かけてルールに沿って自分が学びたい授業を履修して単位を修得して卒業を勝ち取る場所です。単位を取れたというのは、頑張りを継続した結果ですね。1年次のころに授業を落とした経験を経て、それに気づけて努力したので、残りは必修のゼミだけです(笑)

浦本：実を言うと、あの時は私たち教員側も大変でした。コロナ禍前はオンライン授業を行った経験がなかったので、TeamsとかZoomとか使うために、ノウハウを身に付ける必要がありました。ただし、対面授業がなく課題が多くなると、学生の不満は増えますよね。学生の声に応えようと試行錯誤し、授業の性格に合ったオンライン授業のやり方を見つけ、なんとか乗り切ったというのが教員側にもあると思います。その他、コロナ禍で大変だったことはありますか？または、大学への要望とかがあれば聞かせてください。

佐久川：オンライン授業なのでパソコンが必要となるわけですが、ほぼ使ったことがなかったので操作方法に慣れることから大変でした。また、ネット環境のせいで、Teamsから強制的に遮断されたり、Zoomに急遽変更したりとかがありましたね。そういうIT技術以上に大変だったのが、やっぱりレポート課題の量です。例えば、収録された授業を見てそれについてレポート課題が出されたりすると、後回しにしやすいんですね。それが積み重なり課題の山になり(笑)量が溜まってしまって。その課題地獄が一番大変でした。

— 同：わかる!(笑)

佐久川：また、大学からの情報が多く、重要な情報を見落とししたりしたことがありました。大学当局の対応方針に沿って授業が対面かオンラインかが決まると思うんですが、1日の中で対面とオンラインが混ざる日もあり個人的にやりづらさを感じました。また、先生によっては、こちらがメールを送信してもなかなか返信がいただけないこともあり困りました。



佐久川 政哉 [さくがわ せいや]
法学部
法律学科 3年次
豊見城高校出身



人がまばらな5号館ロビー。
コロナ前は多くの学生が各々の時間を過ごす場所でした
(2021年1月ごろ)

比嘉：そうですね。課題など先生方から出されたことは期限を守って送信しているのに、リアクションが無いときもあり、不安になりました。丁寧に返信してくれた先生もいて、そういう先生の授業は安心して受講することができました。

照屋：万が一、またコロナ禍当初のような混乱が発生した時に対応してもらえると心強いのですが、授業のこととか気軽に聞ける総合相談窓口みたいなものがあればよかったなと思いました。先生方もオンライン授業の対応とかでバタバタしてたと思うので……。

浦本：対面だと窓口で様々なことを聞けたと思いますが、行動制限をしているので大学に来れないので相談しようにもできない状況があったと思います。それを大学としてもうもう少し拾う方法をもあったかもしれませんね。逆に、コロナ禍になって自分が変わったこととか成長したことを聞かせてください。

佐久川：情報に対して敏感になりました。情報を持たないと大学生活を乗り切れないと気付いて、友だちとも情報共有や相談などを密にするようになりましたね。

嘉数：私の場合は、1年次のころに単位をだいたい落としたので、どうしたら4年間で卒業することができるかと考え、情報の必要性に気付きました。自らわからないことを調べたり友だちに聞いたりして乗り越えてきました。また、メールをしっかりと確認して、必要に応じて返信する習慣がつかしました。

浦本：港川君はコロナ禍で国内留学に行ったと思いますが、なぜ、制限のある中で留学したんですか？

港川：もともと県外に行きたいという気持ちがあったんですが、行動制限のおかげでといいますが、どうしても行きたいという気持ちに変わり、2年次に熊本学園大学に留学しました。熊本でもほぼオンラインだったので沖縄にいる時とあまり変わりませんでした。サークルやインターンシップなどに参加して、友だちを作り交流する機会を積極的に持ちました。沖縄に帰ってきた今でも、熊本の友だちとつながっているので、制限のある中ででしたが留学して良かったと思っています。現在就活中なんですが、目上の人や先生に対してメールを送信するのは、オンライン授業だからこそ身についたかなって思います。オンライン授業を通じて大学生なりの送信の仕方を身につけたので、就活時に企業へのメールはスムーズにできています。



港川 琉 [みなとがわ るい]
経済部
地域環境政策学科 3年次
小祿高校出身

港 川：留学やオンライン授業の経験は、今振り返ると良かったと思っています。やりたい事のために行動する、チャレンジすることに抵抗がなくなりました。

照 屋：自分から積極的に問い合わせることができるようになりましたね。1年次のころはよく大学に問い合わせをしていたので、苦手だった電話問い合わせを克服して、対応方法が自然と身についたと思います。現在、電話対応が多いバイトをしています、この時の経験が今につながっています。

比 嘉：ざっくり言うと、自ら行動するようになったことです！

浦 本：これは大きいですね。私のゼミ生を見ていると、コロナ前は3・4年次になっても受け身だった人が多かったのに、コロナ禍になって情報が大量に届き、それを読まないとうちにもならないから必死になって読む。必要な情報をとりにいく。コロナ禍を生き抜くために、自ら行動するようになった学生は多いかもしれませんね。



照屋 杏佳 [てるやきょうか]
総合文化学部
人間福祉学科社会福祉専攻3年次
糸満高校出身

嘉 数：私は、コロナ禍で制限がある中で、自分自身と向き合い続けました。そして、コロナだからと自分に言い訳するんじゃなくて、自分が納得して動こうと決めました。だって10年後、大学時代を振り返ったときにコロナだったから何もしてなかった、っていう思い出って嫌じゃないですか！（笑）

この気づきは、コロナ禍だからこそ気づけたことだと思います。

広報課：広報課からも一つ聞かせてください。今回集まっていたみなさんはコロナ禍で何か変わるきっかけを掴み、自ら行動し続けている学生だと思います。しかし、まだコロナに振り回されて、もしかしたら自ら動けていない方も周りにはいるのではないのでしょうか。もしかしら、きっかけがなければみなさんも受け身のままであったかもしれません。自分が変わった分岐点などを教えてください。

嘉 数：コロナのせいにしてる人って、今でもいる気がします。確かに、コロナ禍になって様々なことが制限されましたが、自ら動けないというのは、実はコロナのせいじゃなくて自分自身の在り方だと思うんですね。振り返ってみると、それに気づけたことが分岐点だと思います。

佐久川：大学に単位のためだけとかを考えている方はまだ受け身かもしれません。ただ、卒業したら社会が待っているの、どうするんだろうと思ったりします。私は1年次のころは何もできずダメだったと思っていたので、しっかりと学べるゼミに所属したり、サークル活動にも力を入れました。改めて振り返ると、もしコロナ禍じゃなかったら想像した時、私も受け身の人間だったかもしれません。

照 屋：高校までと違って、様々な地域から人が集まるので、自分との接点が少ない環境から始まると思います。その環境で友だちを作る、何かをするというのはとても大変です。私たちの世代は、コロナ禍という制限がある中からのスタートだったので、友だちを作ったり何かをする必要性を強く感じ、私なりに行動したことが分岐点だったと思います。おかげで、いろんな人と接してエネルギーを得ています。



港 川：私は、やっぱりコロナ禍でも留学しようと思ったことと、熊本の制限がある中でも何かしようと行動したことが分岐点だと思います。

比 嘉：オンライン授業などで知り合った友だちに積極的に話しかけるようにしました。そうすると、積極的に話することができない人は離れていきました。これは行動しようと試行錯誤しはじめた私との分岐点じゃないかと振り返ると思います。

玉 城：高校までは、決められた枠組みで友だちとつながってました。しかし、大学はその枠組みがないので、これまでと違う友人関係を作りたいと思うか思わないかが大事です分岐点ですよ。それこそ、自分と違う価値観の人と友だちになりたいかとか。皆さんが言っているように、ようは自分のやりたいことや友だち関係も結局自分の気持ち次第ですよ。

浦 本：様々な人と交わり、様々な考えを知る、それが大学ですよ。

みなさんの大学生活を振り返る時、「コロナ」という言葉が重要なキーワードになります。コロナウイルスが身近に忍び寄っていて、自宅待機を強いられ先が見えない不安を抱えたからこそ、その状況を変えたいと強く思い行動に移した。その分岐点にあるものは、「すべては自分のあり次第」ということが6名に共通しています。

社会は荒波です。その荒波に立ち向かうための準備期間が大学だと思うんですね。だからこそ、どのような形でもいいので「自ら気付き行動できる学生」をひとりでも多く増やしたいと、私は思っています。ここにいる6名は「コロナ」と「大学」がキーワードになり変わることができたと思います。もちろんここに登場したような6名の学生すべてではないと思います。むしろ少数派かもしれませんが、そういうみなさんがリーダーシップをとって、ぜひ、周りを巻き込んで元気になって欲しいと期待しています。



大学生生活を充実したものにするために、
みんなで工夫し、充実した大学生生活を目指しましょう！

O K I U 青春白書

～活躍する学生たち！～



Shota KAWAKATSU
川勝 渚羽太

総合文化学部社会文化学科 3年次
八重山高校出身

ゼロからやりたいを形に！

何か行動を起こす、それもゼロから初めるというのはとてもエネルギーが必要なことです。

無いなら創る、という気持ちから「芸能文化サークル ピリカウタリ」を創設した川勝君。様々な人とつながり、活動の幅を広げている川勝君に、これまでのあゆみやこれからやりたいことなどを聞いてきました。

■ 「ピリカウタリ」を立ち上げようと思ったきっかけを教えてください。

私は石垣島出身で、高校時代に、オヤケアケハチという地元の英雄を題材にした現代版組踊に参加しました。舞台当日までの練習や準備はとてもキツイですし、同じ仲間と意見の食い違いからぶつかることもあり嫌になることもありました。しかし、舞台が終わったあとのお客さんからの拍手をもらった時に、今まで大変だったことかを乗り越えて、今まで積み上げてきたことを認めてもらえた気持ちになります。この経験を続けているうちに、ずっと舞台にたち表現した

い、という気持ちが芽生えました。

大学入学してもその気持ちが途切れることなく、照明スポットに浴びて演技がしたいと思っていましたが、そのようなサークルはありませんでした。何かしたいと思っていた時に、私と同じように高校時代に舞台を経験していた現副団長と出会い、意気投合し、自分たちで活動拠点を作ろうということになり、ピリカウタリを結成しました。

■ ピリカウタリの意味を教えてください。

アイヌの言葉をお借りしました。

「ピリカ」が「良い・良き」、「ウタリ」が「仲間」とい意味で、直訳すると「良き仲間たち」という意味です。また、アイヌは北、私たちが住む沖縄は南。そして、大学を構成する人は、年代、国籍がバラバラです。北の

言葉をお借りし南の沖縄の芸能文化を中心に、人の垣根を越え、様々な人が集まるような団体にしたいと思い、この名前にしました。この名前は、先ほどお話しした、副団長がネーミングしました。

■ ピリカウタリの活動内容を教えてください。

自分たちの想いを表現するために、沖縄の芸能演舞を中心に据えながら、様々な文化・ジャンルをジャンルパフォーマンズを作っていくことが活動の中心です。そのパフォーマンスの質を高め、自分たちが納得するために毎週稽古を積んでいます。

稽古の成果を広めるために、ゲリラライブを企画したり、学内外のイベントに積極的に参加しています。また、パフォーマンスだけでなく、ゴミ拾いなどのボランティア活動にも参加し、様々な方々と交流しつなげていくことを大事にしています。

■ これまでの活動で一番印象に残っていることはなんですか？

私たちの自主公演である「芸能文化交流フェスティバル 新祭の息吹」を開催したいことです。



■ なぜ、芸能文化交流という位置付けにしたかを教えてください。

コロナ禍により人と人とのつながりが薄れました。中でも、私たちは様々な人とつながることができたので、せっかくなんで芸能・文化を持ち寄り、新たな

可能性を生み出し、観客と一緒に新たな世界に誘いたかったので、芸能文化交流という位置付けにしました。

■ 創立して1年目で自主公演まで開催しましたが、そのエネルギーはどこから生まれたんですか？

実を言うと、1年目で自主公演を終えるまでは考えていなかったんですね(笑)

私と副団長の設立時に決めた4年間の目標は、1年目にミュージックビデオを作成し、私たちの活動を知ってもらうための様々なツールを制作。そして、そのツールを利用し仲間を増やしながら組織を固め、3年目で自主公演をするための資金集めや準備をし、4年目で自主公演を開催する予定でした。

■ 自主公演の感想を聞かせてください

最後はカチャーシーをシメにしましたが、卒業の年に見ようと思った景色がこんなにも早く見ることができました。自主公演参加団体やお客さんがみんなで踊っている姿を見た時に、自分自身が感動しすぎて動けなくなりました。この公演を実現できて幸せだなっと思

1年目の目標であるミュージックビデオの制作のために動きだしたんですが、私を含めメンバーにいるみんな欲が湧いてきて、じゃあ、今年度でなんでもいから舞台をやろう!という方向に舵をきりました!(笑)

その結果が、先ほどお話しした「新祭の息吹」です。

ました。この自主公演を開催するにあたり協力を快く引き受けてくれた「琉球風車」さんや「浦風」さん、「書道部」さんなどの学内の芸能サークルや業者さんから、友人や家族の協力なしでは実現しませんでした。本当に感謝しています。

■ 今後の活動について聞かせてください。

自主公演で味わった充実感をまた経験したいというのが出てきますよね!

次の公演も、自分が想像できない何かできるんじゃないか、という欲が湧いてきます。

ピリカウタリのチーム理念に「みんながやりたいことをやる」というのがあります。メンバー一人ひとりの想いやアイデアをチャンプルーし、形にして行き続けたいです。



■ 最後に一言。

何かやりたいけど、何をしたいかわからないあなた!ぜひ、ピリカウタリで自分のやりたいを形にしていましょ!



Instagram
@okiu_pirikautari

<https://pirikautari.wixsite.com/okiu>

O K I U 青春白書

～活躍する学生たち!～

Honoka IGEI

伊藝 ほのか

産業情報学部企業システム学科 3年次
北谷高校出身



行動を生み出し、様々なひとつつながる!

自分が何をしてきたか、何かに力を入れてきたか、などを振り返ったときに「何もできなかった」と思った瞬間はありませんか?

コロナ禍で制限があった中で、振り返ると、「何もない」ことに愕然とし、このまま大学生活を終わらせたくないと思い、学生コミュニティ「Uni」を立ち上げた学生がいます。

今回は、Uniを代表して伊藝ほのかさんにお話しを聞きました。

■ 「Uni」を立ち上げようと思ったきっかけを教えてください。

私は、学科で学んだことを社会でどう活かせるかを体験する学P※1をやりたいと思い、企業システム学科に入学しました。ただ、私の入学した年は、コロナ元年(2020年)だったので、入学式もなく、入学後、すぐに行動制限になりました。そのため、学Pも中止になりました。

最初のころはボーとしている時間を過ごしていましたが、それじゃダメだと思い、大学に入学するきっかけになった「大学で学んだことを活かす」ためにはどうしようか考えるようになりました。

※1 学Pとは? 沖縄ファミリーマートさんが主催し、県内の学生が参加し、県内のファミリーマートで販売する商品の開発から販売促進までを体験できる実践型のインターンシップ

大学3年次になり、授業が対面に戻りつつある時期に、Uniの中心メンバーである同じ学科だった与那覇さんと石倉さんと初めて出会いました、色々話をしていくうちに同じ想いを抱いていて、意気投合し、何かをしようということになりました。

何かをはじめるとなると、コロナ禍だから、を言い訳に大学生活を蔑ろにせず、「なにかしたいけど何をしたいかわからない人たち」を巻き込んだ何かをすることを原点として、学生コミュニティ「Uni」を立ち上げました。

私たちのコンセプトは、「伸びる学生×広がるコミュニティなにかしたいをカタチに」です。



■ Uniの主な活動内容を教えてください。

Uniは、企業や自治会と連携したボランティアコミュニティです。自治会とコラボしたイベントから企業との企画・開発、他大学との交流をしています。

また、大学祭で私たちが行っている学生シークワーススタンドを出店などもしました。

■ 自治会との連携についてももう少し聞かせてください。

Uniを立ち上げて間もないころでした、緑化活動やボランティア活動に取り組んでいたんですね。その時に、真和志地域で松島自治会の方と知り合うことができました。その方々を通じ、加入世帯数の減少や高齢化の進展など、県内自治会が抱える課題について知りました。

自治会に私たちが協力できないかをUni内で模索しました。そこで、大学で学んだ知識と私たち世代に存在するSNSを活用し、自治会と学生をつなぐ方法を思いつきました。私は、学科で学んだ、「広告論」や「消費者行動」などのマーケティングの知識をUniの活動に活かしています。

現在は、那覇市の助成金を得て、地元の人しか知らないような隠れ名所も含めた真和志地域のローカルマップ作りや、緑化活動、地域の課題を発信するプロジェクトに取り組んでいます。



■ 自治会との連携で苦労していることを聞かせてください。

那覇市の補助金をいただいているので、報告書の作成などが大変です。また、定期的に意見交流を行っているのですが、そのプレゼンテーションの資料を作るための準備に時間を費やしています。

松島自治会との活動を聞き、他の自治会さんにもお声かけいただき、さまざまなプロジェクトが動き始めています。自治会によって課題が異なるので、その解決策を考えるための準備など、やるが増えています。

■ Uniの魅力をお教えてください。

まず、何かをしたいと思っている学科を越えた同世代の仲間が在籍していることが一番の魅力です。メンバーには、色々なことに好奇心がある人が多く在籍していますので、仲間の意見から活動につながっています。

また、自治会の方との共同プロジェクトを通じて社会人と関わることができる。これをサークル活動で形にできるのは大きいと思っています。

■ Uniの今後について聞かせてください。

活動を初めて間もないサークルです。私も含め中心メンバーが卒業年次になるので、Uni組織固めと、運営に協力してくれる後輩につなぐことを考えています。

■ 伊藝さん個人の夢についても聞かせてください。

私、人が好きなんですよ!(笑)

だから、いろんな人とつながりたい。それも日本人だけでなく外国の人とも。なので、留学がしたいですね。知識として知っていることと、実際にそこで知ったことは違いますよね。だから、現地のひとと現地で

つながり、様々な価値観に触れ、文化を見たいという気持ちがあります。

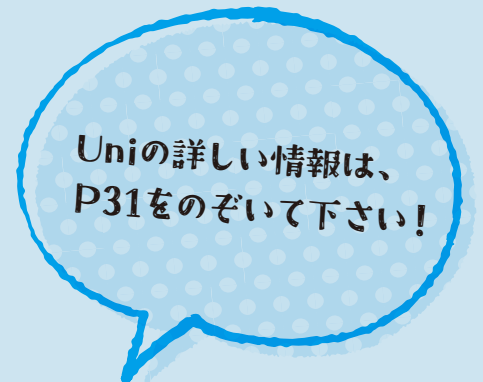
でもUniの組織固めは私のやりたいことでもあるので、そこもやりたいことなんです。

欲深いですね!(笑)

■ 最後にひと言!

夢を夢で終わらせるか、それとも形にするかは皆さんの想いにかかっていると思います。特に大学生は、高校生までとは違い、自分のやりたいことは自分次第ですべて形にすることが出来ると思っています。ぜひ、やりたいことをするために模索して動いてください。

そして、何かをしたい!と思っているかたはぜひUniへ!





経済学部地域環境政策学科 准教授

Ritsuko UMEZAKI
上江洲 律子

文学作品を通じて自分を見つめる

皆さんは、自分を変える1冊の本に出会ったことはありますか？ 出会いがあった人、なかった人、それぞれかもしれません。

本は、異なる価値観に言葉を通じてアクセスすることができるツールです。そして、様々な本を読めば読むほど、多様な価値観に触れつつ、自分の世界を広げられます。

大学生になり、アルバイト、サークル、授業と忙しい毎日を過ごしている皆さん。忙しい毎日を忘れ、立ち止まってじっくりと先生の研究室を覗いてみませんか？ 自分の中にある何かを変えるきっかけがあるかもしれません。

先生がフランス文学に興味を持ったきっかけを教えてください。

フランス文学を意識するようになったのは、高校1年生の頃です。15歳ですね。その年代の多くの人を持つ悩みだと思いますが、その頃、「したいと思うことがない」という悩みが私にもありました。

実際、幼い頃から強い興味を抱くことがほとんどなく、自主的にしたいと思うことが何もなかったんです。その屈託、いわゆる、悩みの一つをあまり他人に伝えてなかったんですが、その悩みは私にとってはとても重く、私を苛んでいました。

私は首里高校に進学をしましたが、入学したとたん将来どのような職業に就くか、そのために大学に進学するかしないか、大学進学をするためにはどのような分野に進むかといったことを考えざるを得なくなりました。結局のところ「自分が何をしたいのか」という棚上げにしていた問題がさらに重く降りかかってきました。そんな不安な気持ちをかかえて高校生活をスタートさせた頃、たまたま図書室に行ったときにジャン＝ポール・サルトルの『水いらず』という短編集を手に取り、そこに収録されている、『-指導者の幼年時代』という作品に衝撃を覚えました。

この作品の内容を簡単に説明すると、まず主人公の青年リュシアンは、「自分とは何か」と自分に問い続けている人物です。また、彼の父は工場を経営する社長ですが、彼はその仕事を継ぎたくなく、勉強も好きでなく、どうでもいいと考えています。しかし、悩み続けた結果、「自分にとっての自分」ではなく、「他人にとっての自分」というものに自分の在り方を見出し、その悩みから脱却していきます。

私は、この作品にでてくるリュシアンの世界観や人間観、彼が導き出した結論に全く共感できませんでした。ただ、この作品を読みながら問題となるのは自分に存在するかもしれない可能性を、身を切る思いで切り捨てながら、自分の意志で1つの可能性を選択し、その選択したことに責任をもって行動していくことだということに気付きました。図らずも、この『水いらず』とい

う一冊の本が、私を「唯一無二の絶対的な目標の設定」という呪縛から解き放ってくれることになりました。これが1つ目のきっかけです。

サルトルの作品に出会えたおかげで悩みに押しつぶされることなく高校生活を送っていましたが、三年生になっても将来の職業についてイメージが持てませんでした。ちなみに、その時期にはサルトルの作品だけでなく、彼と志を一緒に行動していたフランスの思想家シモーヌ・ド・ボーヴォワールの作品なども読み始めていました。彼女は女性が歴史や社会から押し付けられた女性像から解放されることや、女性が自己を追及する自由を訴えていました。特に彼女の『第二の性』は、私の自己認識、言い換えると「自分の在り方」に関して示唆を与えてくれるものでした。これが2つめのきっかけです。

この2つのきっかけでフランス文学に興味を持ち、とりあえず、ボーヴォワールの作品を原書で読めるようになることを目標として、大阪大学の文学部に進学をしました。

最初に読んだフランス語の原書はなんですか？ またそのきっかけを教えてください。

皆さんもよくご存じだと思いますが、アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリが書いた『星の王子さま』です。私が高校時代に通っていた学習塾で国語を担当していた先生からその原書を頂きました。大学1年生の夏休みに、辞書を片手に、単語を1つずつ調べながら、何日間もかけて読みました。フランス語で書かれた作品を1人で読み通した初めての機会でした。



大学ではフランス文学を 専攻したそうですが、その時から 研究者を目指していたんですか？

全くその気はありませんでした!(笑)

研究者という具体的な職業を目指すまでに
すぐく時間がかかりましたが、お話ししますね。

就活をしていた時期は男女雇用機会均等法
(1986年施行)が制定された時期だったこと
と、経済的な自立をしたいという気持ちがあり
株式会社リクルートに就職しました。そこでは人
事や就職情報誌事業部の企画を担当していま
した。何より「精一杯働けること」を目的として就
職先を選択しましたが、そこは私にとって多くの
ことを教えてくれる「学びの場」となりました。

しかし、勤めて数年後、仕事にも慣れ、生活も
安定してくると就職する際に棚上げしていたこ
とが再び私を苛み始めました。それは、「自分は
どういった仕事をしたいのか」という問題でし
た。働けば働くほど高い収入が得られますが、
本を読む時間もなく自分の時間が仕事に支配
されていることに疲弊していたんでしょうね。
そこで、「今から10年後、やりがいを感じながら
働く自分をイメージできるような仕事に就くこ
と」を新たな目標に据えました。すると、やり残し
ていたことがあらためて思い出されました。

それは、大学時代に十分に身に付けることがで
きなかつた「フランス語をフランスの土地で勉強
する」ということです。リクルートに勤めていた期
間で留学するための資金が十分にたまっていた
ので、自費でフランスに留学をしました。



1年弱の留学でしたが、フランス語の勉強だけ
でなく、合間をみつけフランス以外の国に旅行
をしました。その経験を通じ、「自分が興味を
持って学び続けることを活かすことができる
仕事」という自分の求める職業イメージをよ
やく掴むことができました。

帰国後に、フランス語を活かせる職業という
ことで、貿易会社に勤め、貿易に関する文書翻
訳や、フランスから来日した取引相手の通訳を
担当しました。ただ、自分の力不足を痛感したの
で、仕事を続けながら、東京にある翻訳学校に
通い始めました。そこで教材として取り上げら
れていたのがフランスの文学作品でした。最初
は仕事のスキルをアップするために受けていた
授業で、フランス語で書かれた文学を読み解く
喜びを思い出し、心から「フランス文学という
ものを学びたい」と強く思うようになりました。
自分がしたいことを初めて明確に意識すること
ができた私は、迷わず、ただただ「学びたい」と
いう思いだけで、母校である大阪大学の大学院に
進みました。

その後は、非常勤教員などを続けて収入を得
ながら博士課程まで進みました。

先生の研究内容を 具体的に教えてください。

研究対象はアンドレ・マルロー(1901-1976)
というフランスの作家の小説作品です。活動の
領域が広い作家で、彼のユニークな生き方が、
作品に大きく影響しています。

マルローは若い頃にインドシナ半島の密林で
盗掘を試みて逮捕されます。その体験が『王道』
という小説に結実します。解放後は、インドシ
ナ半島でフランス政府が行っていた植民地政策に
反感を持つと同時に、不当に扱われている地元
の人たちに共感を抱き、短い間ですが、反植
民地政策に関わる新聞を発行したりしています。
このように若い頃から政治活動をしていたことが、
ド・ゴールとの共闘に発展したと思います。

このような経験からもうかがえるように、マル
ロー作品には2つのテーマが存在します。それ

は「自分自身とは何か」と「死すべき存在である
人間」です。先ほども言いましたが、彼はフラン
スからインドシナ半島に行くことで異文化と出
会います。当時は治安が維持されていません
し、乗り物も発展していませんからその行為に
は命の危険が伴います。言い換えると異文化と
の出会いはある種、冒険にならざるを得なかつ
たわけです。そのような冒険ゆえに、発見され
た「他者」は自国においては見出すことのできな
い自分自身を認識させる存在となり、そこに「自
分自身とは何か」ひいては「人間とは何か」とい
うテーマが展開されます。

もう一つが、「死すべき存在である人間」で
す。死すべき存在である人間が、死という出来
事に対してどうあるべきか、どう行動するべき
か、そしてどう向き合っていくか、というのが全
ての作品に通底するテーマとなっています。

私自身、マルロー作品を長く読んできました。
彼は不当な扱いをされている人の立場に立ち、
その人を救うというよりも、ともに戦うという姿
勢で作品を書いています。その一方で金に困
り盗掘をしたり少し嘘つきだったりとなかなか
奇妙な人物ですが、掴みどころがないところに
魅かれて今も研究を続けています。

最後に学生にメッセージを お願いします。

ラテン語のことわざに「運命の女神は目が見
えない」、フランス語に訳すると«La Fortune
est aveugle»という言葉があります。これは、



私たちの運命は自分で近づき掴みとるしか
ないということです。

先ほどお伝えしたとおり、私は幼い頃から高
校時代までかなえない夢がありませんでした。た
だ、自分がやるべき勉強には手抜きなく取り組
み、自分なりに、自分のできることを積み重ね
てきました。自分のやりたいことが見つかった
時にそのことが武器となり、今、私がいる場
所にたどり着くための布石を打ってくれたの
ではないかと思っています。

周りを見渡すと、社会が不安定になっていま
すよね。時代ってどう変化するのを見通すこ
とができないことが多いと思います。だからこ
そ、自分に残って力となるものを少しでも増
やせるよう、自分のために学び続けて欲しい
と思います。



インタビュー実施日：2023年3月28日

うえず りつこ 上江洲 律子

経済学部 地域環境政策学科 准教授

大阪大学大学院文学研究科博士課程仏文学専攻 単位修得退学
一般企業や貿易会社、非常勤教員の経験を経て2012年に本学に
着任。

担当科目は、「フランス語」「文学」など。



本学が寄贈した資料が活用されました

信泉と復帰～世替わりの沖縄の未来発展を希う～

(大濱信泉記念館・大濱信泉 生誕130周年記念特別ロビー展&沖縄県立博物館・美術館「沖縄、復帰後。展」移動展)



展示コーナー入口

昨年6月3日(金)、本学創立50周年における地域への感謝と地域貢献活動の一環として、本学開学に尽力された大濱信泉先生の祝辞音声(写)を石垣市の大濱信泉記念館(石垣市)に寄贈しました(学報118号にて紹介)。同記念館には、大濱先生の資料は保存され一般公開されておりますが、同館に肉声音源は保存されていなかったようです。

2023年2月、同記念館では大濱信泉先生の生誕130周年を記念し「信泉と復帰～世替わりの沖縄の未来発展を希う～」と題

し、大濱信泉 生誕130周年記念特別ロビー展&沖縄県立博物館・美術館「沖縄、復帰後。展」移動展を開催。ロビー展で「沖縄国際大学と信泉展」という特集を組み、本学が寄贈した大濱先生の肉声音源や、沖縄国際大学創立に関する公文資料等の展示を行っておりました。その展示の視察と表敬を兼ねて、前津学長(石垣市出身)が同記念館を訪問しました。



本学竣工式典(1974年9月に挙行)
祝辞を述べた大濱先生の音声を確認することができる

ロビー展では喜舎場学芸員(本学社会文化学科卒業:石垣市出身)より、本学が寄贈した資料の扱いや公開方法などについて説明をうけました。また、大濱先生を説明する上で外すことができない、「復帰」、「海洋博」と「沖縄国際大学」との関連性について、展示上のポイントなども伺うことができました。



説明を受ける前津学長

おはま のぶもと 大濱 信泉 (1891年-1976年)

石垣島登野城で生まれる。八重山高等小学校卒業後、沖縄県立師範学校に入学するも途中で退学し、上京。その後、早稲田大学法学部英法科に進み、1918年、同科を首席で卒業。卒業後は三井物産の弁護士を経て、1922年から早稲田大学にて教鞭をとるようになる。1954年に第7代早稲田大学総長に選出される。また、南方同胞援護会会長、佐藤総理の沖縄問題懇談会の座長として、本土復帰に尽力する。

本学と大濱先生との関りは本土復帰前まで遡る。大濱先生は復帰後の沖縄の私学育成と適応される日本の大学設置基準の許可を得るために、当時の沖縄大学と国際大学の統合に向けた「沖縄における私立大学の復帰対策構想(大濱試案)」を提示。この案をもとに準備がすすめられ、1972年(昭和47年)復帰直前の2月25日、当時の沖縄大学の一部と国際大学を統合して沖縄国際大学は設立された。設立基金として当時の文部省から補助金が交付、日本私学振興財団からの長期融資を受けられたのは大濱先生のご尽力によるものである。



特設展フライヤー



創立50周年特設
サイトはこちら >>>

<https://50th.okiu.ac.jp>

12月22日 国際交流クリスマスパーティを開催しました!

12月22日(木)の昼休みに、国際交流クリスマスパーティを開催しました。

3年ぶりのクリスマスパーティには、約40名の学生が参加し、軽食やクリスマスケーキを食べた後、プレゼント交換をしました。

短い時間ではありましたが、学生たちはそれぞれに交流を深め、写真を撮ったり、おしゃべりをしたりと、笑顔で楽しんでいました。



12月23日 令和4年度書評・映画評賞の表彰式を開催しました。

沖縄国際大学図書館書評・映画評賞は、本学学生の読書・映画鑑賞活動の向上を図ることを目的として、より多くの学生に図書館利用を奨励促進するため実施しております。

令和4年12月23日、図書館1階会議室にて令和4年度書評・映画評賞の表彰式を開催致しました。

今年度は、19編(書評19編)の応募があり、図書委員会が厳正に審査した結果、最優秀賞1編、優秀賞3編、佳作10編の入賞が決定致しました。

表彰式では、各受賞者に賞状と副賞が手渡された後、入賞者を代表し最優秀賞を受賞した道下あかねさんより受賞のことが述べられました。受賞者の皆様、おめでとうございます。

最優秀賞 道下 あかね (大学院 科目等履修生)

佳作 下地 南桜 (地域行政学科 2年次)
 棚原 由梨香 (人間福祉学科 3年次)
 玉城 りんの (日本文化学科 1年次)
 知念 直幸 (人間福祉学科 2年次)
 天久 聖菜 (人間福祉学科 3年次)
 宮里 朝陽 (人間福祉学科 3年次)
 我如古 莉子 (日本文化学科 1年次)
 新垣 比南子 (英米言語文化学科 4年次)
 宮城 柚 (人間福祉学科 3年次)
 與儀 えみり (人間福祉学科 3年次)

優秀賞 勢理客 佑 (英米言語文化学科 3年次)
 仲本 陽 (日本文化学科 4年次)
 高良 武琉 (社会文化学科 2年次)



1月10日・17日

地域行政学科 2022年度公務員試験合格者報告会・若手公務員講話会を開催しました!

○公務員試験合格者報告会

毎年、その年度の公務員試験に合格した4年生や卒業生を招いて実施される「公務員試験合格者報告会」が、2023年1月10日の「公務員研究I」の時間に開催されました。

今回は、試験合格者のうち、沖縄防衛局、沖縄県庁、浦添市役所、うるま市役所、宮古島市役所、西原町役場、中城村役場、沖縄県警察、宮古島市消防に合格した11人(4年生9人・卒業生2人)が登場し、独学での勉強法、予備校の利用方法、スケジュール管理のコツ、1次試験・2次試験対策として具体的に取り組んだ事など一つ一つ丁寧に経験談を話してくれました。

今年度は、長引くコロナ禍の影響もあってか、モチベーションの保ち方やストレス発散法といった長く孤独な闘いを乗り切るための実践的なアドバイスも多く、受講者は熱心に登壇者の報告に耳を傾けていました。さらに、合格者の個別報告後に小グループに分かれて行われる合格者への質問タイムには、受講者からの質問が尽きず、講義時間をオーバーしたグループもあったほどです。

受講生たちには今回の話を大いに参考にしてもらい、同じゴールを目指す仲間たちと切磋琢磨しながら、2年後には是非、頼もしい先輩たちのように「合格」を勝ち取ってほしいと願っています。



○若手公務員講話会

2023年1月17日、学生たちに、行政の現場についてより理解を深めてもらうため、そして、目指すべき公務員像を具体的にイメージしてもらうために、「公務員研究I」の時間を活用して、「若手公務員講話会」を開催しました。

今回、講話を引き受けてくださったのは、うるま市役所に勤務されている安座間さん(商工労政課)と平良さん(こども家庭課)、南城市役所に勤務されている我那覇さん(税務課)の3人。公務員になりたての1年目から公務員生活5年・10年の方までと勤続年数もそれぞれ異なっていたことから、受講生にとっては、3人の方の講話を通して公務員として経験を積み重ねていく過程についても知ることができる貴重な機会となりました。

3人の講師の方に共通していたのは、「市民」のために働く公務員の仕事に大きなやりがいを感じているということ。もちろんスムーズにいくことばかりではなく、困難な現場も、大きな重圧がかかることも、そして、市民の方から厳しい言葉をかけられることがあることも、率直に話してくれました。そのうえで、公務員という仕事の魅力を生き生きと語る3人の講師のお話には、受講生はみな引き込まれた様子で、熱心にメモを取っている姿がとても印象的でした。

講話後の質疑も活発で、公務員試験受験時の勉強方法、ワークライフバランス、出産・育児との両立、業務に関する知識の習得方法など多岐にわたる質問に、講師の方それぞれ丁寧に回答してくださいました。

この日の講話を聴いた受講生の中から近い将来、この場所に戻ってきて後輩たちに話をしてくれる人が1人でも多く出てくることを期待しています。



1月10日 本学学生が「2022うらそえYA文芸賞」において煌賞(浦添市長賞相当)を受賞しました。

人間福祉学科心理カウンセリング専攻3年次の天久聖菜さんが、「2022うらそえYA文芸賞」の短編小説部門において、【煌賞(きらめき賞)(浦添市長賞相当)を受賞されました。



天久さんは、2021年度も本文芸賞において、【輝(かがやき)賞】(教育長賞)を受賞しており、2年連続での受賞となりました。

浦添市立図書館では、平成4年に県内初のYA(ワイエー)コーナーを設置し、中学生から大学生をYA世代と位置づけ、その世代を重視したサービスに努め、文学活動や読書活動を盛り上げてきました。

1月20日 新春書初め会を開催しました!

1月20日(金)に、留学生を対象に日本の正月文化を体験するイベントとして、新春書初め会を開催しました。

書初め会では、まず初めに書道の先生から筆の特性や使い方等の説明があり、その後は参加者それぞれが今年の目標や好きな文字を自由に書きました。慣れない書道に緊張した様子の留学生たちでしたが、何枚か書いていくうちに筆にも慣れ、思い思いに書初めを楽しんでいました。



1月20日 県外高校の学年発表会に本学サークルが参加しました!

本学社会文化学科の学生で構成されるサークルSmilife(スマイライフ)の部員が、2月6日、埼玉県立草加東高校の2年生学年発表会に参加しました。

参加したのは、名嘉真伶さん(4年次)、伊野波紗稀さん、譜久村有珠さん、山城翼さん(いずれも3年次)と顧問の藤波潔先生です。Smilifeは、草加東高校からの依頼を受けて、11月に実施された沖縄修学旅行に向けた事前学習、現地プログラムの支援をおこなってきており、今回の発表会は事後学習として実施されました。

草加東高校の皆さんは、沖縄戦を事例にした平和学習をおこない、班ごとの討議を経たクラス内での発表会を実施し、各クラスの代表8チームの発表がおこなわれました。どの発表も大変充実した内容で、Smilifeの部員は発表に対して質問をしたほか、すべての発表に対してコメントを述べるなど、事後学習が充実するようお手伝いをおこないました。



1月28日 祝! 復活。経済学科1年次によるスーパープレゼンテーション大会!!

コロナ禍で対面での開催が見送られていた、経済学科恒例行事、スーパープレゼンテーション大会が開催されました。統一テーマは「沖縄経済の課題と展望-ウィズコロナ・アフターコロナへの対応-」です。8ゼミから選出された8つのチームで予選を行い、決勝では予選で選ばれた2チームが1年生全員の前で、プレゼンを行いました。

優勝チームは、比嘉ゼミの「キャプテンみつぐ(仲根根洋治・知念伶莉・天久愛翔)」で、報告テーマは「沖縄の観光の課題とブランド創造」、準優勝は照屋ゼミの「子供たちの明るい未来(上原大知、岸本誉、宮城裕平・與那嶺千奈津)」で「子供の貧困について」でした。

優勝チームは、観光地でのアンケートを踏まえ、沖縄県の観光地の価値を高めるためのポイントについてプレゼンを行い、活発な質疑応答が行われました。準優勝チームは、「子ども食堂」へヒアリングを行い、大学生が取り組める提案につなげるなど、両チームとも、現地に足を運んで調査した成果が高い評価を受けた大会となりました。



優勝した比嘉ゼミの皆さん

2月17日 本学卒業生が第6回宮良當壯賞を受賞

本学法学部法学科を2000年度に卒業(前津ゼミ出身)し、現在沖縄県立芸術大学で准教授を務めている呉屋淳子さんが第6回宮良當壯賞(主催:八重山日報)を受賞しました。授賞式・祝賀会が2月11日に石垣市で開催され、本学から前津榮健学長、田場裕規先生、石垣直先生が出席されました。

宮良當壯賞は、①八重山や沖縄の言語・文学・芸能の研究に顕著な業績を挙げた人、②八重山地域の祭祀、文化の継承に大きな役割を果たした人一人に与えられる賞です。呉屋さんは教育人類学の立場から、八重山地域の学校と地域芸能が密接に関わり合い創造されていく現場を「学校芸能」と位置付け研究しており、それが評価されたそうです。狩俣恵一選考委員長(本学名誉教授)からは、「学校教育現場での民俗芸能の相互関係を15年もかけて現場で調査し研究をまとめた成果は、新たな民俗芸能研究の視座を提供している」と講評がありました。

祝賀会の来賓挨拶で前津榮健学長は、「呉屋さんは学生時代から様々なことに興味があり、韓国留学なども経験した素晴らしい自慢の教え子です。その教え子が、私の生まれ島の芸能について研究をし、それが評価されたことは感無量です。これからも研究に精進し、より大きな研究成果を発表してください。」と激励を述べられました。



2月17日

内閣府沖縄総合事務局主催「第4回省エネチャレンジカップ」で経済学部宮城佑香さんが最優秀賞を受賞

沖縄県立博物館・美術館で2月17日、第4回省エネチャレンジカップ(内閣府沖縄総合事務局主催)の授賞式が開催されました。省エネチャレンジカップは、沖縄の地域の特性や気候風土にマッチした省エネのアイデアを競うコンペティションです。

本学経済学部地域環境政策学科4年次の宮城佑香さんが最優秀賞に輝き、内閣府沖縄総合事務局長の田中愛智朗様より、表彰状を授与されました。宮城さんは、自動車の燃料としてグリーン水素(太陽光発電で作られた水素)を地域で「自産自消」する提案をまとめました。授賞式では、この提案内容について講演する機会も与えられました。

本学からは、宮城さんの最優秀賞に加えて、地域環境政策学科4年次の阿波根顕弥さん(沖縄海邦銀行賞)、前富里弥優さん(琉球セメント賞)、3年次の奥平奈津樹さん(琉球銀行賞)、具志堅成伍さん(拓南製鐵賞)、2年次の金城祐祐さん(沖縄銀行賞)が入賞しました。また、沖縄国際大学学生環境委員会の有志による「チーム沖国大」(代表 新垣光太さん)も沖縄電力賞を獲得しました。

第4回となった今年度は35件の応募の中から14件が入賞しましたが、そのうち最優秀賞を含む半数を沖国大生が占めるという大活躍となりました。



2月22日 公認心理師・臨床心理士合格者が前津学長を表敬訪問いたしました

2月22日、2019年度から2022年度に公認心理師・臨床心理士に合格した本学修了生が前津学長を表敬訪問いたしました。今回訪問したのは、13名の合格者のうち9名の修了生です。前津学長は、「コロナ禍で苦勞もあったかと思いますが、多くの合格者に大学を挙げて嬉しく思います。色々な分野で専門的な資格を活かして、公認心理師・臨床心理士を必要とする方をサポートし支えて欲しいと思います。」と合格者を激励いたしました。

本学修了生で受験した方は全員合格しており、全国平均の合格率約50%程度と比較しても高い合格率となっています。



3月17日 令和4年度卒業式・大学院修了式を執り行いました

2023年3月17日(金)、本学講堂兼体育館にて第51回卒業式並びに第25回大学院修了式を執り行いました。卒業生・修了生と教職員のみで式典を執り行い、式典の様様をオンラインでライブ配信いたしました。各学科卒業生及び大学院修了生の代表に、卒業証書・学位記が授与された後、学業や課外活動・スポーツなどで顕著な功績があり、他学生の模範となる卒業生・在生に対して表彰が行われました。

今回受賞となったのは、人物及び学業ともに優秀で他の模範となる学生として宮城佑香さん(地域環境政策学科)に経済学部長賞、中村涼香さん(日本文化学科)に総合文化学部長賞が贈られました。

また、ボランティア・人命救助等で社会的に認められる個人及び団体に贈られる学生部長賞には、学生環境委員会の仲島辰星さん以下51名、文化活動及びその他の分野で本学の社会的評価の高揚に著しく貢献したと認められる個人及び団体に贈られる校友会会長賞に齋藤星耕ゼミ再生可能エネルギー・省エネルギーグループに贈られました。

その後、前津学長による告辞が行われ、卒業生を代表して、産業情報学科の松原準さんが答辞を読み上げ、企業システム学科の波平紗也加さんから記念品の贈呈がありました。式典終了後、各学科・研究科の教員より卒業生・修了生一人ひとりに卒業証書・学位記が授与されました。学部卒業生1,176名、大学院修了生25名の計1,201名がそれぞれの目標や夢に向けて、新たな一歩を踏み出しました。



3月19日 春のオープンキャンパスを開催しました!

2023年3月19日(日)に春のオープンキャンパスを開催し、260名近い参加がありました。

春のオープンキャンパスは、これから大学・学科選びをする高校生が多いので、オープニング講座や在学生との懇談会を設けました。オープンキャンパスの様子をピックアップしてご紹介します。

オープニング講座

自分らしい将来の見つけ方。～後悔のない大学選びをするために～
株式会社リクルートより講師の方をお招きし、大学生活でできること(大学に進学する意義)、自分に合う学校/学部/学科選びの重要性とその方法、オープンキャンパスで見てほしいポイントなどをお話してもらいました。

講師の方からは、「知っていること」の中からでない「やりたいこと」は決められない、だからこそオープンキャンパスを通じて「自分の知っていること」をどんどん増やして欲しい。」というメッセージがありました。



学科紹介&フリートーク

先生や在学生による大学での学びや、大学生活について気になることを何でも質問していました。



個別相談ブース

入試、奨学金、留学、就職、教職について相談ブースを設けました。入試相談や、入学後のキャンパスライフについて、さまざまな相談がありました。



キャンパスツアー

在学生がキャンパス内を案内するキャンパスツアーを実施しました。コンビニや図書館などの施設を在学生と一緒に回り、学内は参加者で賑わっていました!



① 自転車競技部

部長

南風原 凜之介

(ハエバル リンノスケ)

入部方法

21AD062@okiu.ac.jpに連絡

部活動場所

沖縄全域



みなさんは自転車のロードレースという競技を知っていますか？街中でロードバイクに乗っている人を見かけたり、アニメ「弱虫ペダル」を見てご存知の方も多いと思います。

ロードバイクは人間が動力源の乗り物なのに、自動車やバイクのようなスピードを出することができるすごい乗り物です。沖縄のきれいな景色の中で風を切りながら走るの最高です！大切なのは楽しんで自転車に乗ることです。

練習では観光地めぐりをしたり、美味しいごはんを食べに行ったりします！初心者でも大丈夫です。

練習は週に1回でみんなのペース合わせて走ります。大学で新しいことに挑戦しませんか？一緒に走るのを楽しみにしています！！



沖縄国際大学には活動的な学生がたくさんいます！それを象徴するようにクラブ・サークル活動が盛んな大学です。そんなクラブ・サークルの中から4団体をご紹介します。

② 硬式テニス部

部長

大盛 蒼生

(オオモリ アオイ)

入部方法

活動時間にお越し頂くか、公式 Instagram アカウントにDM してください！

部活動場所

沖縄国際大学テニスコート



Instagram
@OKIU.TENNIS

硬式テニス部は、男女15名で活動しています。沖縄の全米オープンモデルのテニスコートのもとで球だし、試合形式の練習を通して県での上位入賞を目指しています！練習日は毎週火曜、金曜の18時からやっており、他大学のテニス部との交流や合宿も行う予定です。テニス部のいい所といえば、空きコマの時間に部室に集まってみんなで勉強をしたり、おしゃべりをしたり、Wiiをしたり、...先輩後輩間でのつながりができ、大学生活の充実間違いなしです！

テニスに興味がある方、初心者の方、どなたでも大歓迎です！それでは一度しかない大学生活楽しみたい君、連絡待ってます！



③ 吹奏楽部

部長

護得久 愛香

(ゴエフ アイカ)

入部方法

活動時間にお越しいただくか、Instagram・X(旧Twitter)までご連絡ください。

部活動場所

7-201



Instagram
@okikokusui



X(旧Twitter)
@okikokusui

沖縄国際大学 吹奏楽部の主な活動として、吹奏楽コンクール、定期演奏会、学内での定期コンサート、その他演奏会など広く活動しています。

沖国吹の特徴は学生主体でのサークル活動です。演奏面から運営面までを学生主体で行うことによって楽器だけでなく人としても成長できる場です。また、人数が少ない分一人一人がやりがいを感じられます。

初心者やもう一度楽器を演奏したい!という方も大歓迎です!私たちと一緒に楽器を吹きませんか??音楽に興味のある方はぜひ!

活動日: 水・金の17時~21時



私たち沖国吹は、「音楽を楽しむ!」をモットーに活動しています。



沖縄国際大学には活動的な学生がたくさんいます! それを象徴するようにクラブ・サークル活動が盛んな大学です。そんなクラブ・サークルの中から4団体をご紹介します。

④ 学生コミュニティUni (ゆに)

部長

上原 梨玖

(ウエハラ リク)

入部方法

まずは入部希望者の方に“なにかしたい”を見つけてもらうため、参加者として1ヶ月~2ヶ月間、各プロジェクトに参加してもらいます。(内容例:ボランティアやイベントへの参加等) その上で、各プロジェクトの中からやりたいことを選択してもらい、運営部になってもらう仕組みです。

部活動場所

5-205



Instagram
@uni_1002

私たちUniは、“日本で一番地元根ざしだコミュニティに”をコンセプトに、ボランティア活動やイベントの企画・運営を中心に活動を行うコミュニティサークルです。

現在は、30名のメンバーと共に毎週水曜日17時にミーティングを行い、週末は自治会から頂いた依頼をもとにボランティアやイベント運営などの活動を行っています。

私たちは、運営部と参加者という2つの関わり方を通して、地域から沖縄を盛り上げるための活動を行っているため、自分の強みや個性を活かしてバリバリ活動したいという方だけでなく、バイトしながらでも気軽に活動できる場所が欲しいという方にも、ぜひ一度見学に来て頂ければと思います!



🌻興味のある方は、学部学科氏名をインスタのDMに送ってください!🌻



Pick Up!



Now on air

沖国大ラジオ講座

～万国津梁を目指して～

この番組は沖縄国際大学の教員が毎週それぞれの専門分野に関するトピックについてお話す番組です。2017年度後期より放送を開始し、放送回数は既に100回を超えています。

ROKラジオ沖縄にて絶賛放送中!

ROK : FM93.1 / AM864
ラジオ沖縄 : 【毎週水曜日 18:30～18:45】



過去の放送は、2018年7月25日以降の放送がROKラジオ沖縄のポッドキャストでお聞きできます。

ROKラジオのポッドキャスト

大学行事案内 (2023年4月～2023年7月)

4月 1日(土)	入学式、第1回新入生・編入生オリエンテーション(新入生学生生活紹介)
4月 2日(日)	在学生オリエンテーション
4月 2日(日)～4月 5日(木)	前期・通年科目Web仮登録期間
4月 4日(火)	第2回新入生オリエンテーション、外国人留学生オリエンテーション
4月 7日(金)	前期講義開始
4月 7日(金)～4月13日(木)	前期・通年科目登録調整期間
5月 2日(火)	体育祭
7月 2日(日)	オープンキャンパス
7月16日(日)	オープンキャンパス

OKIU SNS

大学公式SNSでは随時情報を発信中です。LINEでは入試広報関連情報を、InstagramとX(旧Twitter)では大学構内の風景やキャンパスライフを、Facebookでは保護者や卒業生向けの情報を中心に更新しています。ぜひ一度ご覧になってみて下さい。



LINE
@okikokudai



Instagram
@okikokudai_pr



X (旧Twitter)
@okikokudai_pr



Meta
@OKIU.PR

平和・共生 個性・創造 自立・発展



沖縄国際大学



編集 | 事務局広報課 〒901-2701 沖縄県宜野湾市宜野湾2-6-1 TEL.098-893-7629 Email : pubchr@okiu.ac.jp

印刷 | 株式会社 東洋企画印刷